

# 図書館だより

4

2020

No.86



San Francisco Google Park

特集1

## 深山書評 受賞作品紹介

特集2

## 図書館リニューアルオープン

独立行政法人 国立高等専門学校機構  
都城工業高等専門学校

National Institute of Technology (KOSEN), Miyakonojo College

目 次

学校長挨拶	学校長 岩佐 健司	1
図書館長挨拶	図書館長 笹谷 浩一郎	2

退職される先生方の挨拶

「図書館について思うこと」	建築学科 林田 義伸	3
「英語漂流記」	建築学科 原田 志津男	5
「ヘミングウェイに生まれて」	一般科目文化 西村 徳行	7

**特集1**

深山書評 受賞作品紹介		9
-------------	--	---

「ラメルノエリキサ」	5 E 田中 恒成	1 0
「僕のメジャースプーン」	5 E 白川 款大	1 1
「バイオレット・エヴァーガーデン」	1 C 池袋 優斗	1 2
「考え方」	3 A 蛭原 海飛	1 3

**特集2**

図書館リニューアルオープン		1 4
---------------	--	-----

# 学校長挨拶

## 新装図書館に思うこと

岩佐 健司

昨年度からの改修が終わり、解放感あふれた明るい雰囲気醸し出した本校の図書館が新たに開館しました。本校在校生だけでなく、いままで同様に広く地域の皆さんも利用できます。学生のみならず地域の方々にも新たな図書館に満足されることと思います。

なお、現在執筆中（3月）においては新型コロナウイルス感染防止の観点から、当分の間は利用時間を限定しております。

新装開館にあたり、あらためて図書館の価値と設置意義を考えたいと思います。図書館では、高価な本に無料で出会えることに加え、蔵書を通じて必要な情報提供ができることがまず挙げられます。情報検索のためだけならPCやスマートフォン等電子機器使用により簡単に実現できます。他方、本からの情報検索は時間がかかりやや面倒ではありますが、検索作業に付随して周辺関連知識の習得と、その検索項目を通じた知識体系も併せて理解できます。情報収集に限らず「ふらり」と訪れた図書館で専門書、文学書、実用書等々でかけがいのない一冊との出会いもあります。書籍とじっくり対峙して新しい知識や世界を知るきっかけになることが期待できます。図書館で借りる本には個人的な書き込みなどではないので必要と思った書籍には書店で購入をして自分のものとして何度も読み返し、その本が持つ体系的な思想や知識構成を学んでください。それは皆さんにとって一生の宝ものになります。

つぎに図書館は本に囲まれて過ごす知的空間を醸し出す場です。静かな環境で雑念が減り、かつ少しばかりの緊張感もあり集中的な学習ができます。図書館での学習を継続する習慣が身につければ、知的学習能力育成に大いに役立つものと確信します。

この度の改修に伴い本校図書館には学生間のコミュニケーションができるコアスペースやPC利用の施設も充実しており、インターネットでの検索や情報収集が可能です。そこでは前述した個人としての図書館利用とは異なったIT利用や少人数での会話による課題解決のための協働学習が可能です。そこで多様な人たちとの交流を通じた創造的活動拠点になることを期待しています。

教育研究施設としての評価の一つとして、図書館の充実があります。限られた予算の中で蔵書数を増やすことと併せて学校独自の専門書を揃えることも重要です。そして最も重要なことは学生諸君の利用が多くなることがその評価になります。図書館新装を機に知的生産の場としてこれからも大いに活用してください。

# 図書館長挨拶

笹谷 浩一郎

このたび、長年の念願であった図書館改修がようやく実現し、新しく生まれ変わった図書館を皆様にご紹介できることは、図書館長として、この上ない喜びです。この改修のために、ずいぶん前から多くの教職員の方々が準備にあたり、「知の拠点」としてふさわしい図書館の在り方について議論を重ねていただきました。その土台を築かれたのは、私の前任の望月先生、西村先生という素晴らしい先輩方です。両先生のこれまでのご尽力に対し、心より感謝いたします。

では、生まれ変わった図書館についてご紹介いたします。皆様には実際に目で見て確かめていただきたいので、ここではごく簡単な説明に留めます。

玄関から入ると、そこはメディアホールになっています。学生の皆さんの作品や、インターンシップ・就職関連情報、地域住民の方々への情報を掲示するスペースです。メディアホールの奥には「ICTみやまルーム」があります。ICT設備を完備し、授業や会議、イベントなど多目的に利用できます。座席数は84席あるので、2クラス同時授業も可能です。

玄関から右に進むと、カラーニングスペースになっています。地域・国際交流スペースとして利用できます。憩いの場・交流の場・自由な場としてもご利用ください。利用者アンケートで要望が多かった飲食可能な談話スペースを実現しました。中庭の奥、旧AVR室があったところにはCALL教室が移動しました。以前よりも広くなり、圧迫感が解消されています。

階段を上って2階へ進みましょう。南側にはカウンターを備えた閲覧室があります。この部分は「静かな空間を確保してほしい」という利用者アンケートでの要望に応じて、読書も勉強も集中できるよう、サイレントスペースとなります。自学自習用の座席も大幅に増やしました。

北側にはグループ学習室を設けました。閲覧室が「静の空間」であるのに対し、ここは「動の空間」としてグループワーク、研究・イベントの打ち合わせ等に活用できます。その他、新聞・雑誌の閲覧、DVD鑑賞コーナーも用意してあります。

グループ学習室の隣には3つのミーティングルームがあり、グループワーク、少人数での会議や研修、研究発表等で利用できます。グループ学習室を含めれば、40人のクラスを10人ずつ4グループに分けての活動も可能です。ミーティングルームの隣にはICT自習室があります。PCを使った情報収集、レポート作成、グループワーク等に対応できます。

皆様に気持ちよくご利用いただけるよう、現在スタッフ一同準備に励んでおります。皆様のご来館をお待ちしています。

# 退職される先生方の挨拶

## 図書館について思うこと

建築学科 林田 義伸

本校図書館の改修工事が進んでいる。どのような図書館になるか、楽しみである。高校生の頃、学校の図書館は学習の場でもあったが、遊び場の一つでもあった。友達と図書館に集まり、何やかや無駄話をする。そして、開架書庫の書棚を散策し、面白そうな本があったらそれを借りる。

ただ、現在の職業に就いて、図書館との拘わり方が若干違ってきた。図書館に出向くのは、もっぱら調べ物をするためである。最近では、インターネットの発展で、文献の蔵書場所を捜すのが楽になった。ネットで、どの図書館にあるかが分かり、メールでその文献の閲覧を申し込む。最近の研究で必要な文献は、熊本大学、東京大学、横浜国立大学、関西学院大学、国立西洋美術館等々で閲覧させて頂いた。

現代の図書館の役割や機能は、大きく変化しつつあるが、図書館の本来の役割は文献の保管である。私は、西洋古代建築に関して研究している。研究に欠かせないのが、古代遺跡の発掘報告書である。遺跡を発掘し、報告書を作成するには、膨大な経費と長い時間が必要であり、一度、発掘報告書が出版された遺跡に関しては、その後、新しい報告書が全く出版されない場合も多い。この場合、図書館を頼るしか無い。

図書館の始まりは、古代メソポタミアと言われている。王宮等から多くの楔形文字が刻まれた粘土板が発見されている。ヘレニズム期においては、アレキサンドリアの図書館が最も有名である。プトレマイオス王朝時代に建設され、蔵書数は40万とも50万とも言われているが、ユリウス・カエサルの時代に火災に遭い、その後衰退したと言われている。

ヘレニズム時代には、他にペルガモンとエフェソスにある図書館が有名である。どちらも現在のトルコにあるヘレニズム都市である。写真1は、エフェソスの図書館（セルサスの図書館、2世紀初頭）で、ファサードが復元されている。1階部分はコンポジット式、2階部分はコリント式のオーダーが配されている。オーダーとは、柱や梁の組み合わせとその装飾方法が定式化されているものである。この様に複数階の建物を作る場合、上下のオーダーは異なるものが使用される。このファサードでは、梁が交互にセットバックされており、また、小さなペディメント（破風部分）が、梁がセットバックした上部に載せられている。通常、ペディメントは、上部の一つ大きなものが載せられるが、ここでは小さな、三角形と円弧状のペディメントが交互に置かれ、極めて賑やかな構成となっている。図書館内部は、壁沿いに3層分の書架を置いていたようで、ファサードが2階建て、内部が3階建てとなる。この図書館が建設された頃、パピルスが品薄となり、羊皮紙の使用が盛んになったようである。

羊皮紙は、基本的に丸められて保管されるという印象がある。オックスフォード大学のマートン・カレッジの図書館は、「初めて本が立った図書館」ということを誰かが言っていた。ただ、羊皮紙を丸めず、木製のハードカバーを付けたのはローマ帝政期からあったという話も聞いたことがある（ここで紹介している情報は、曖昧な点も多いので、確認して下さい）。

30数年前、オックスフォードのアシュモレアン博物館（写真2、19世紀中旬）の図書館で、文献を捜したことがある。この博物館のファサードは、古代ギリシアのバッサエのアポロ神殿（紀元前5世紀）の内部に使用されたイオニア式オーダーがモチーフとなっている。



図書館は、博物館の展示場の隅に入口があった。そこにはいくつもの部屋があり、私に必要な文献はその内の一室に殆ど集約されていた。その部屋は開架式で、読みたい本を書棚から引き出し、自由に読むことが出来る。ただし、本を自分で書棚に片付けることは禁止されており、本を書棚に返すのは、図書館員の仕事である。これは、元の位置に図書を間違いなく片付けるため、膨大で貴重な図書をなくさないためのルールである。この図書館はその後大改造がなされ、図書館もかなり近代化したと聞いているが、このルールは変更されていないだろう。

目的の本が博物館の図書館で探せなかった場合、ボドリアン図書館に出向く。オックスフォード大学は、英国最古の大学で、12世紀に創建された。この大学は、簡単に言えば、それぞれ独立したカレッジがあり、その集合体としてのユニバーシティ（大学）が存在している。先のマートン・カレッジは、13世紀中頃の創建である。大学全体の施設として、ボドリアン図書館やアシュモレアン博物館等がある。オックスフォードの図書館全体では、1000万冊を超える本が所蔵されており、大概の本は探すことが出来る。

ボドリアン図書館は閉架式で、入口を入ると大きな図書検索の部屋があった。現在はコンピュータを用いた検索システムが出来ているが、私が訪れた時は、検索はカードで行っていた。

目的の本は、1906年出版の大型本で、閲覧を申し入れたところ、3時間後に指定された建物の図書室に行くよう言われた。その図書室の受付で、本とペーパーナイフを渡された。昔の本は、数頁分を印刷し、それを畳んでそのまま綴じてある。従って本を開くとき、一頁分ずつペーパーナイフで切って開く。私が閲覧したかった部分は、出版されて100年以上、誰も目にしていなかったことになる。また、外出したい時や、帰りたい時は、本を机の上に置いたままにしておく。本人が受付に返却しない限り、その机の上に置かれたままとなる。即ち、その間、何日でもその本をその場所で独占して読むことが出来るというシステムだ。この様にして、貴重な本は保管され、管理され、利用されてきたのだ。



写真1 セルススの図書館(2世紀前半)



写真2 アシュモレアン博物館(19世紀中旬)

## 英語漂流記

物質工学科 原田志津男

退職者は「図書館だよりに寄稿せよ。」との図書館長様のお達しにより、これが最後のデューティと思い、一筆啓上します。

「図書館だより」ということで、自分の今までの人生で一番買いあさった本は何かと考え、自宅の本棚を眺めたところ、並んでいるのは、英語習得のための様々なノウハウが書かれた本ばかりでした。ということで、これまでの私の英語との格闘？人生について少し書かせていただきます。

高校時代、英語は得意でもなく不得意でもなく、ただ、大学受験のときの足かせにならない程度に勉強してきました。大学の教養部（今は死語）に入ってからには工学部でしたので、必修科目の英語は確か年間2科目程度、それも英文和訳のみ、専門課程に進んでも卒論のゼミで専門英語を和訳する程度ということで、大学を出るころは、英単語も英文法も記憶の片隅に残っている程度で高校時代までに修得した知識すらほとんど消え去っていました。さらに、卒業後も、就職したのが地元の建築設計事務所でしたので、20代は英語に触れる機会はほぼ皆無でした。

ところが、三十路を過ぎて、ご縁があって母校の助手に採用され、学の世界に入ってから2年ぐらいたった頃、突然、上司の教授（恩師）から「シンガポールで国際会議があるので論文発表するように！」とありがたいご指示があり、そこから再び私の英語とのお付き合いが始まることになりました。

このシンガポールでの発表、これまで英語の発表なんてやったことがない上に、10年以上も英語から遠ざかっていたのですから、できるわけありません。仕方がないので、渡航する2週間くらい前からビジネス英語の英会話学校に仕事帰りに通い始めました。英会話学校では、私の担当のアメリカ人の先生がとても至れり尽くせりの方で、初日に私の英語力（英会話力）をみるや否や、即、論文を受け取り、発表原稿をつくってくれました。さらに、その先生は発表原稿を自分の声でカセットテープに吹き込んで教材として私に渡してくれました。それから渡航前までは、空いた時間はただひたすらテープを繰り返し聞きながら発表原稿を暗記し、英会話教室では、先生の前で発表の練習をするという毎日でした。

それでも、最後の英会話教室でのリハーサルはボロボロでした。しかし、その努力？の甲斐あってか、シンガポールでの発表は足をガクガクさせながらも何とか無事に済ませることができました。“無事に”と書いたのは、多分、言いたいことは伝わっていたとと思っているからです。ネイティブのチェアマンの先生が、私のプレゼンを聞きながら、頷いてくれたので、その後、高専に着任してからも、恩師からのご命令（これもいろいろと大変なことがあったのですが）や大学の後輩の先生や企業の研究者の方たちとの共同発表などでスウェーデンやオランダで開催された国際会議に参加発表する機会を得ることができました。

また、高専機構が主催している当初のISTS(International Symposium on Technology for Sustainability)は、現地の学生と専攻科生たちが自分たちの研究論文を英語で口頭発表するシンポジウムでしたので、当時私の研究室に所属していた2人の専攻科生にも、私のシンガポールのとおり同じ経験をしてもらおうと（復讐か？）、タイのバンコクや台湾の台北で開催されたISTSで発表してもらいました（セッション中は質疑応答もすべて英語です）。

そんな感じで、お仕事でも時々英語を使わざるを得ない羽目になりましたので、何とか安直に英語を習得できないかと、書店に行くと、ついつい英語習得に関する本に手を伸ばしてしまうようになりました。その結果、自宅はもちろんのこと、今の研究室の自分のデスクの前にも、GENIUSの英和辞典やPOCKET OXFORD DICTIONARYのほかに、“技術英文のすべて”、“日本人ビジネスマンのための英語のプレゼンテーション技術”、“たったこれだけで活用自在建設マンの英会話”、“マンガでわかる技術英語”、“アメリカ口語教本入門編”、“絶対合格英検準1級”、“英語がしゃべれるトレーニングブック”、“究極の英語リスニング 1000語レベルで1万語”等々、お堅いタイトルものからラクして英語が身につくような魅力的なタイトルのもまで様々な英語関連の私物の本が並んでいます。また、本だけではなく、10年ぐらい前からは、ほぼ毎日15分程度英語のオンライン学習を続けています。その学習記録によると、現在の私の総学習時間は1320時間、マスターした単語は6218語だそうです。その上、スマートフォンにも、“英辞郎on the WEB Pro”などのたくさん英語のアプリをインストールしています。ということで、英語関連の本や教材には、我が家の奥さんもあきれれるほど、多額の投資をしてきました。なお、お断りしておきますが、TOEICや英検なんて受ける気は毛頭ありません。学校の先生は自分が試験を受けることは嫌いですから（TOEICを何度も受けている専攻科生、本当に尊敬します）。

では、その成果は？と申しますと・・・・・・・・。自己評価ですが、リスニングとスピーキングは1センテンス、5ワード以内、それも中学英語レベル程度なら何とかOKかなといったところです。ライティングの方はと申しますと、アブストラクト程度は何とか独力で頑張りますが、論文本体は論外！英訳に関してはプロに外注します。お金で済むことなら、お金で済ませます。ということで、仕事で（日常生活でも）使えるほどの英語力は全く身につけていません。本や教材にお金をかけても、集中した時間を英語だけにそれほど割いたわけではないので、仕方ないかなと自分を納得させています。

最後に、お陰をもちまして、本年3月で都城高専を退職させていただきます。これからは、多分、時間はそれなりにできるでしょうから、成果は期待せず、あまり自分にプレッシャーをかけないようにして、これまで趣味？で集めてきた英語関連の本に再度目を通しながら、それなりの英語力が身につくように頑張っていきたいと思っています。

ここまでで2364文字になりました。本文も漂流してしまいましたが、英語科の笹谷図書館長様、これぐらいで宜しいでしょうか？

The Adventures  
of  
English



## ヘミングウェイに始まって

一般科目文科 西村德行

この3月で、都城高専での39年間の教員生活にピリオドを打つことになりました。『図書館だより』に退職記念の寄稿の依頼があり、筆を執っている次第です。若い頃に、「ヘミングウェイと言えば」という書き出しで、『図書館だより』に拙文を載せて頂いたことがありましたが、今回もこの書き出しで始めて、いくつか本をご紹介できればと思います。

ヘミングウェイと言えば、日本人によく知られている作品は、『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)ではないでしょうか。連続84日の不漁にもめげず漁に出たサンチャゴが、大きな魚に出会います。3日間の死闘の末に仕留めた獲物を舟にくくりつけて港に向かいますが、獲物から出た血の匂いを嗅ぎつけたサメに魚の肉を食われてしまうというストーリーです。登場人物は、ほとんど一人ですが、老人の見る夢やつぶやき、祈りと言ったものが示唆に富んでいて、読む人が違えば、または同じ人でも読む年代によって読後感が大きく変わる作品だと思います。

ヘミングウェイ自身も狩猟や釣りが小さい頃からの趣味でしたが、彼にとって釣りは趣味以上の意味があったかもしれません。それが強く感じられる作品が、「大きな二つの心臓の川」(”Two Hearted River”)です。これは、主人公が川でキャンプをしながら鱒釣りをする様子を淡々と描いた作品です。事件というものは起こらず、釣り・キャンプの様子が克明に描かれていて、一見単調な話のようですが、ヘミングウェイの実体験を知っていると、その見方が大きく変わる作品です。若い頃に第1次世界大戦が起き、彼は従軍記者として、イタリア戦線に出向きました。その際砲撃を受け、脚を負傷して手術を受け、その後しばらくの間は、不眠症に悩まされます。「横になって」(”Now I Lay Me”)という短編にはその様子が描かれています。主人公は闇で目を閉じ眠ろうとすると、魂が身体から抜け出るような気がして眠れなくなります。退屈しのぎに色々なことを考えるのですが、基本的に考えるのが、釣りの思い出です。小さい頃遊んだ川や架空の川の釣りを思って眠れない一夜を過ごすのです。ヘミングウェイにとって、釣りは単なる趣味でなく、「救い」の手段だった時期もあったのかもしれませんが。

釣りと言えば、私も小さい頃から釣りが好きで、今でも暇を見つけては、志布志湾に出かけています。釣りに関する本も集めるようになりましたが、その際よく利用するのが、東京神田の神保町にある鳥海書房です。ここは動植物に関する本を専門に扱う古書店です。私は、出張等で上京した際は、できるだけこの店に立ち寄り、釣り魚の図鑑や料理本、釣りに関するエッセイや小説などを買って来ました。その中には、アイザック・ウォルトンの『釣魚大全』(*The Compleat Angler*)や開高健の『私の釣魚大全』などがあります。

開高健には、釣りに関する写真紀行文・エッセイが多数あります。ブラジル釣行記『オーパ!』など10冊以上の写真付き紀行文を残しています。小説では、朝日新聞社臨時特派員としてベトナム戦争取材した際の体験をもとに書かれた『輝ける闇』『夏の闇』『花終わる闇(未完)』の三部作があります。彼は、ベトナムで最前線に出た際、反政府ゲリラの襲撃に遭い、総勢200名のうち生き残ったのが17名というすさまじい体験をします。開高健が釣りにのめりこんで行ったのも、ヘミングウェイと同じように戦争体験が強い影響を与えたのかもしれませんが。

もう一度神保町に戻りますが、ここにはいろいろな専門書の店があります。演劇・映画関係、音楽関係や洋書専門店など、靖国通りだけでも50軒くらいの店が並んでいます。通りを歩いて行けば、皆さんの興味を引く本に出会うことができると思います。また、9階建ての神田古書センターにも専門店（鳥海書房もここにありますが）が多数入っており、雨の日などは濡れずに何軒か行き来できて便利です。神保町周辺には、本だけでなく、楽器やスポーツ用品を扱う店も多数あります。昔から、近くに大学がたくさんあったからかもしれません。お隣の神田小川町になりますが、ミズノの本店もあります。

神保町と言えば、そこから御茶ノ水駅のほうへ坂を上って行く途中の少し奥まった高台に、こじんまりとしたホテルがひっそりと立っています。山の上ホテルです。このホテルは、多数の作家に愛されたホテルとして有名ですが、池波正太郎もここを定宿とした一人です。彼の作品については、テレビドラマ化されているものが多いので、ご存じの方も多いと思います。『剣客商売』、『鬼平犯科帳』、『仕掛人・藤枝梅安』の3シリーズが代表的ですが、私は彼の作品に出会ってから時代小説に傾倒して行きました。彼の作品はもちろんですが、ほぼ同時代の藤沢周平の作品もほとんど読みました。特にこの年齢になって何度か読み直しているのが、『三屋清左衛門残日録』です。ある東北の藩の用人にまで上り詰めた男が隠居をすることになるが色々な事件に巻き込まれて、と言う話です。職を離れて感じる寂寥感など私も今後経験して行くのかなと思いながら読んでいます。そう言えば、この小説でも釣りの場面がいくつか出てきます。職を辞し、何となく元気のない舅を思って、嫁が釣りを勧めるのですが、山形庄内であろう町の川や海での釣りが描写されています。最近の時代小説では、葉室麟や佐伯泰英の本をよく読みます。葉室麟は、凜とした人物を描くのが得意な作家で今後の作品を期待していましたが、2017年に66歳で亡くなり残念です。

ヘミングウェイから始まっていくつか本を紹介させていただきましたが、学生諸君にはあまり興味を引くものではなかったと思います。お父さん・お母さんやおじいちゃん・おばあちゃんに興味を持っていただければと願い、筆を置きたいと思います。



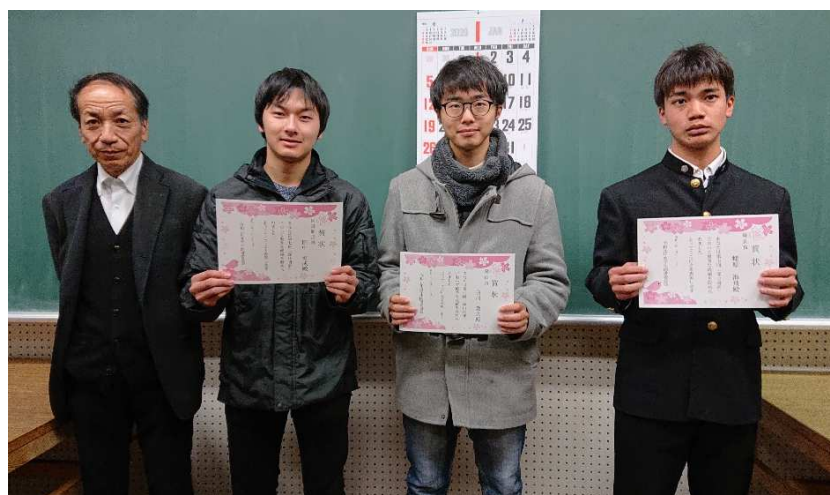
## 「第七回深山書評」受賞発表



<2020年1月20日発表>

第七回深山書評にはたくさんの応募が寄せられました。5名の審査員（図書館長および4名の学生図書委員）で選考した結果、下記の通り受賞作が決定いたしましたので発表いたします。

賞名	クラス	氏名	書評タイトル『書名』 著者名	請求記号
深山賞	5E	田中 恒成	『ラメルノエリキサ』 渡辺 優 著	913.6/7外
図書館長賞	5E	白川 款大	『僕のメジャースプーン』 辻村 深月 著	購入予定
優秀賞	1C	池袋 優斗	オタクがライトノベルで深山書評を書いたら こうなりました 『バイオレット・エヴァーガーデン』 暁 佳奈 著	購入予定
優良賞	3A	蛭原 海飛	『考え方』 稲盛 和夫 著	購入予定



たくさんのご応募ありがとうございました。

# 深山書評 受賞作品

『ラメルノエリキサ』 渡辺 優 著

5E 田中 恒成

ラメルノエリキサというこの小説のテーマは「復讐」ですが、この本を「復讐譚」に分類することはためらわれます。無理にジャンル分けするのなら青春小説になるのでしょうか。しかしそれもなんだかしっくりきません。復讐青春疾走小説なんていう、なんだかわけのわからないアオリみたいな新ジャンルを勝手に作って、それでようやく納得できるような本です。

あらすじもかねて本作の魅力について語りたいと思います。本作の最大の魅力、それは主人公である小峰りなのキャラクターです。通り魔に遭い自分はナイフで切りつけられているのに、逃げる犯人の後ろ姿に「お前絶対ぶっ殺すからな！」なんて叫び、犯人を突き止め復讐を決意することのできる女子高生、僕は小峰りな以外に知りません。また、彼女にとって復讐とは「自分がすっきりするためのもの」という自分本位なものであり、そのスタンスを貫き幼いころから大小さまざまな復讐を完遂してきた大変良くできた子でもあります。

なお、この本は一气読みすることをおすすめします。というか読んでいけば自然とそうなります。なにせ疾走感が半端ではない。復讐がテーマの作品としては珍しく陰鬱な成分の一切が排除されており、物語の展開も非常にテンポがよく、主人公の破滅的でありながらも説得力のある言動の数々がまた新たな疾走感を生み出すという好循環が、190ページに一貫して作り上げられています。これを実現するためには物語の重厚感やミステリとしての面白さはむしろ雑音でしかなく、狙ってやっているのなら、著者である渡辺優は紛れもない天才です。

この本が提供する体験は唯一無二です。読書家もそうでない人も、飽いたら捨てて下さって宜しいなんてことはありませんが、10ページだけでも読んでみることをおすすめします。

## 『僕のメジャースプーン』 辻村 深月 著

5 E 白川 款大

辻村深月という作者の世界にバッドエンドは存在しない。それが彼女の作品を端的に表現した言葉だ。彼女の政界に生きる少年少女たちは皆、他人に打つ明けられない悩みを抱えて苦しんでいる。助けてくれる友人がそばにいるにも関わらず己が傷つくことを恐れたり、周りを馬鹿だと見下し、口を閉じ自ら孤独に身を置いてしまう。しかし現実を見つめ直し悩み抜いた果てには解を得て光に向かって歩み直していくのだ。

私が紹介する「ぼくのメジャースプーン」も小学生の男の子が幼馴染みの女の子を救う為只管に悩み抜く物語だ。「ぼく」と表記される主人公は「○しなければ△をする」という言い回しにより○か△のどちらかを他人に強制する力を持っている。母の言いつけにより力を使わずに生活する彼は、ある大学生が起こした事件をきっかけにその力を見つめ直すこととなる。学校で飼われている兎たちがズタズタに切り裂かれ命を奪われてしまうのだ。

その凄惨な事件は誰よりも熱心に世話に取り組んだ幼馴染の「ふみちゃん」から感情を奪いとり、言葉を発することを封じてしまう。復讐を掲げ犯人を容易に死へと追いやる事が出来る主人公が、どんな罰を与える事がその罪にふさわしいのかを同じ力を持つ大学の教授と対話を通して導き出すというのがこの小説のあらすじである。

他社一人に対して一度だけ行使できる力を誤った使い方をしないように教える解かれる描写が続くため人によってはくどく感じるかも知れない。だがその積み重ねがあったからこそ主人公の答えに私は胸を締め付けられた。彼の行動理念は想像を越えて純粹で、犯人に対する復讐というテーマに囚われていた私は、それを知り漸くこの物語の持つ優しさに気づくことができたのだ。この本を実際に手に取り、主人公が抱いた気持ちへ教授がつけた名に心を打たれる人がいるならば私は嬉しい。



オタクがライトノベルで深山書評を書いたらこうなりました  
『バイオレット・エヴァーガーデン』 暁 佳奈 著

1 C 池袋 優斗

あなたは誰かから手紙をもらったことがありますか？誰かから手紙をもらうと幸せな気分になります。この世に届かなくていい手紙などないのです。僕はこの深山書評の題材にライトノベル「ヴァイオレット・エヴァーガーデン」を選びました。もし、この書評が深山賞になって図書館にライトノベルが入ることになってもそれは僕の知ったこっちゃありません。

物語のあらすじから語っていきましょう。主人公のヴァイオレットは元軍人の代筆屋。人間の肉声を手紙にする仕事をしています。彼女は依頼者の元へ行き手紙を書きますが、その依頼者は皆何かを抱えています。例えば、愛する妻と娘を失った小説家、病の母と取り残される運命の娘、戦場で銃弾に貫かれた青年、両親が行方不明になり孤独となった若い天文学者などです。彼らはヴァイオレットに代筆を依頼し、話して、怒って、泣いて、笑って、心を救われていくのです。

この本の魅力は感動できるストーリーだけではありません。孤独な表現にも目を見張るものがあります。この物語は基本的に、主人公と依頼者の二人を客観的な目線で書いていますが、前の段落で挙げた例の二つ目のように、主人公と依頼者の他にキーとなる人物がいた時、そのキーとなる人物の目線で物語が進んでいくのです。また別の場面では、「こんなことがあったまるか」という言葉で見開き2ページが埋め尽くしているものがあります。キャラの深い後悔がひしひしと伝わってきますよね。

この他にも、ヴァイオレット・エヴァーガーデンの魅力は山ほどありますが、字数制限が迫っているのでこのへんにしときましょう。もしこの書評を読んでこの作品に興味を持ってもらえたら僕は満足です。本屋さんにはあまり置かれていないので、アマゾンでポチって読んでみてください。この書評で、ファンが一人でも増えてくれることを願っています。

## 『考え方』 稲盛 和夫 著

3 A 蛭原 海飛

僕が紹介するこの本の作者、稲盛和夫さんは鹿児島県出身の経営者です。彼は一代で皆さんご存じの京セラという会社を立ち上げた人です。僕がなぜこの本を紹介するかというと自分将来を考えるうえでとても参考になったからです。例えばこの本には稲盛さんが経営してきたからこそ分かる仕事における大事な考え方について書いています。この本はそのような考え方が堅苦しく書かれているわけではなく名言風に書かれていてローランドが好きな自分にとってとてもよみやすかったです。

その中で自分が一番心に響いたのは

「一生懸命働くということは苦しいことです。その苦しいことを毎日続けていくには、自分の仕事を好きになろうと努めることが必要です。仕事の喜びを見出せる人が成功を収めることができるのです。」

という名言です。

この文章が僕の心に響いたのは、決してもともと仕事が好きではない人に向けて言っている所です。自分は建築学科に属しているのですが建築が好きで入ったわけではありませんでした。しかし、そんな中で好きでもない製図をさせられたり模型を作らされたり、とどんどん建築を嫌いになっていました。そんな時に稲盛さんのこの言葉を知って好きになろうと努めていなかったのだと気づきました。それから少しずつですが建築の本などを読むようになり少しずつですが、いままで見向きもしていなかった建築の面白さに気づくことができました。実際、この本の作者の稲盛さんの会社は彼の専門ではありませんでした。それでもただひたすらに打ち込むことによって、やりがいや楽しさを見つけたそうです。

最後に本書では、人生の結果について熱意×能力×考え方と言っています。熱意と能力は0から100までですが、考え方は-100から100までであると言っています。つまり正しい考え方を持っていれば人生はプラスになるわけです。では正しい考え方とは何でしょう。それはこの本に書かれています。



## 新しくなった、図書館

開放的な空間 と 数千冊の本 が あなた を 待っています。

8年間の準備期間を経て、令和2年4月1日にリニューアルオープンしました。構想・計画の段階から完成に至るまで、多くの方々にご協力いただき、心より感謝いたします。

本校学生・教職員並びに地域の利用者の方々に愛される図書館を目指し、スタッフ一同頑張っております。皆様のご来館をお待ちしています。

図書館長

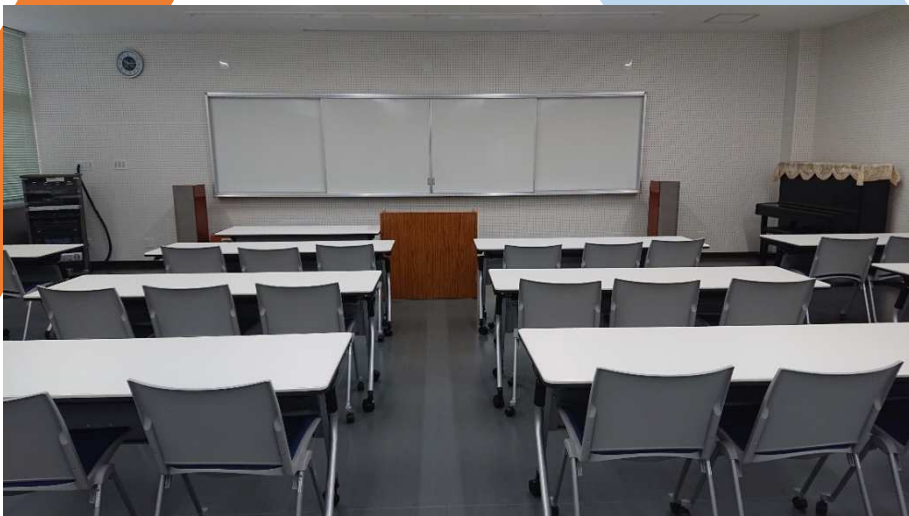


バリアフリーを意識した  
エレベータの設置、  
モダンな空間へと変化

図書館内部も全てが  
新しくなりました。



多くのスペースが  
確保され  
有効活用することができます。







壁を取り払い、これまでの閉鎖的な図書館から生まれ変わりました。  
広いスペースには椅子と机を配置して勉強や談笑ができる空間を作り上げました。

変わったのは、広々とした空間だけではありません。  
中庭は、これまでのコンクリート床から温かみのある木材へと変更されました。  
階段以外にもエレベーターが追加され、気軽に図書館を利用できるようになりました。  
これまでよりも過ごしやすくなった図書館へ是非いらして下さい。



#### 4月中の**注意事項**

- \* 図書館の利用時間は、平日のみ9時～17時となっています。
- \* 貸出は可能ですが、閲覧室をご利用することはできません。
- \* 部外者のご利用はできません。
- \* これらの注意事項は予告なしに変更される場合があります。